

# 剣道技能向上に向けた自己評価・他者評価を活用した指導法の開発について

## —SJSAM C100+を「簡易目線カメラ」として活用して—

鳶田 瑞希 (大阪教育大学)

### 1. 動機及び目的

現在、様々な競技や体育実技の授業において映像分析を活用し、自己観察する機会が広まった。多くの場合、自身やチームの動き方、プレイを横方向あるいは斜め方向から動画撮影し、観察する方法が多い。武道は相手と対峙し戦う競技であり、横方向あるいは斜め方向から撮影される動画は、実際に対峙した時の動きとは異なり違和感もある。剣道には「遠山の目付け」という言葉があるように、視線や相手の動きを捉えることが重要になると論じている。(秋山 2016)

本研究は、被験者の打突を正面方向から撮影、観察し、打突を自己評価・他者評価することによって、被験者の技能向上に影響を与えるか否かについて検証し、被験者の技能向上を目指した指導方法を開発することを目的とした。

### 2. 方法

1) 対象者：0 大学体育会剣道部 17 名

2) 実験方法：自己作成の「簡易目線カメラ」により、被験者の正面方向から基本打ち動画を撮影した。

今回は「面」「小手」「下を攻めての面」「下を攻めて小手」「担ぎ面」とし、被験者には各 2 回ずつ試技を依頼した。撮影後映像をもとに自己評価、他者評価をした。実験は一定の期間を開けて 2 回実施し、その間の差を見ることで有効性を検証した。その際 1 回目実験後の各評価提出後、他者評価の結果を被験者に伝え、技能向上の支援にあたった。

実験は、2023 年 11 月 20 日～2023 年 12 月 18 日に実施した。

3) 撮影方法：アクションカメラ「SJSAM C100+」を「面」の側面に装着固定した。

4) 評価・分析方法：全日本剣道連盟剣道試合審判規則にある、「有効打突の要素・要件」を参考に、各打突について、「氣勢」、「刃筋」、「冴え」、「体勢」の項目から構成する独自の評価シートを作成し、自己評価、他者評価とも撮影した映像を視聴し採点した。評価は 1 点から 5 点とした。なお、他者評価は一定の評価になるように事前に剣道高段者と評価基準を確認したうえで、筆者が実施した。評価したものを得点化し Microsoft Excel に入力し分析した。

### 3. 結果と考察

全被験者他者評価得点平均の 1 回目 (3.10) と 2 回目 (3.58) を比較すると、2 回目の他者評価得点平均が 0.48 ポイント高い。「簡易目線カメラ」を用いることは、今まで見たことのない方向から、自己技能を客観的に視聴したことで技能向上に活用できていることが示された。

次に、全日本学生剣道優勝大会に出場した選手 (以下；全日本群) と選手外 (以下；非全日本群) を比較すると、1 回目：全日本群 (3.33) 非全日本群 (2.77)、2 回目全日本群 (3.77) 非全日本群 (3.31) 各項目とも、全日本群が非全日本群と比べ、高い得点を示している。全日本群がもともと正確な打突していて上に、視聴後の修正能力も高いことが示された。

次に、「氣勢」、「刃筋」、「冴え」、「体勢」の評価項目について、技 (試技) ごとに 1 回目と 2 回目の全点数平均を比較すると、1 回目：「氣勢」(3.47) 「刃筋」(2.85) 「冴え」(2.90) 「体勢」(3.16)、2 回目：「氣勢」(3.84) 「刃筋」(3.78) 「冴え」(3.24) 「体勢」(3.44)、各項目の中で「刃筋」の得点が 1 番伸びている。正面から撮影した映像は、刃筋 (竹刀の動き) が捉えやすく修正しやすいことが示された。刃筋は他方向からの映像ではわかりにくく、意識されにくい技能で、自分自身ではできていると勘違いされやすい技能のひとつである。動画を自己観察し、他者評価を確認したことにより、自己の技術の課題や技術に対してより強く意識できたことが、この結果につながったと考えられる。

このように簡易的な目線カメラの活用でも短期間での技術向上に期待できることが示された。

### 4. 結論

対人競技では、指導者が感じた主観的なイメージを的確に伝える手立ての一つとして映像活用がある。「簡易目線カメラ」の活用は、正面方向から映像化することで、自己の技能を客観化し、技能向上に繋がる可能性が示唆された。今回は短期間の技能の変化は確認できたが、今後、変化した技能が定着していくかどうかの検証が必要となる。

#### <参考文献>

1) 秋山「剣道の面技における目付けの解明」- 剣道最高段位者と大学生競技者による検証-2016 年